

# 『訓蒙図彙』考序論

## ——絵入百科事典データベース構築とともに

石上 阿希

### はじめに

近年、日本の古典籍をめぐるデジタルアーカイブがめまぐるしい展開をみせている。2000年代半ば以降、早稲田大学図書館、国立国会図書館などが所蔵資料のデジタルアーカイブを本格的に始動させ、2014年からは国文学研究資料館が10年間で約30万点の画像データ化を目標とした「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク」を開始した。古典籍画像へのアクセス環境は飛躍的に整いつつある。

では、それによってどのような研究が可能となるだろうか。稿者は、2015年より国際日本文化研究センターにおいて古典籍のイメージに特化したデータベースとして「近世期絵入百科事典データベース」の構築を進めている<sup>1</sup>。江戸時代に出版された「絵」と「言葉」を併録した書物を検索することができれば、様々な分野の研究者にとって有用なツールとなるのではないかとこの着想による。本データベースの核となるのが日本で最初の絵入百科事典とされる中村惕斎編『訓蒙図彙』である。

寛文6年(1666)の序文をもつ『訓蒙図彙』<sup>2</sup>は、20冊14巻から成り、事物を17の部門に分けてその形状と名称を絵と言葉によって明示している。採録された事物の総数は1484にのぼる。本書以降、絵と語が一对になった様々な事典類が刊行され、その形式をもじったパロディが作られるなど、本書から派生した書物は多岐にわたる。また、『訓蒙図彙』自体も、元禄8年(1695)刊『頭書増補訓蒙図彙』、寛政元年(1789)刊『頭書増補訓蒙図彙大成』と2度にわたって増補改訂版が作られており、時代の要求に応じながら多くの読者を啓蒙し続けた。

さらにその影響は日本のみに限らない。例えば、ドイツ人ケンペル(1651–1716)の『日本誌(*Geschichte und Beschreibung von Japan*)』や『廻国奇覧(*Amoenitatum Exoticarum Politico-physico-medicearum*)』における動植物の記述・図版には、寛文8年(1668)版の『訓蒙図彙』の影響が十分にみとめられる<sup>3</sup>。

しかし、当然ながら『訓蒙図彙』も部門の構成や図版、言葉の選定など多くの先行する書物を参考にしている。本書は、古今東西の書物から知識だけでなく事典を編む方法論も学びつつ絵入百科事典という一つのスタイルを生み出し、後続の書物へとつなげていった書として位置づけることができるだろう。

<sup>1</sup> 2017年7月に「近世期絵入百科事典(試作版)」を公開。

<sup>2</sup> 本書には刊年が明記されていないが、小林祥次郎は序年誌および、寛文8年刊の『訓蒙図彙』との関係から寛文6年版と称して大過ないであろうとする(小林祥次郎編『江戸のイラスト辞典 訓蒙図彙』勉誠出版、2012年、969頁)。

<sup>3</sup> 日本学士院日本科学史刊行会編『新訂版 明治前日本生物史』第1巻、臨川書店、1980年、北村四郎「ケンペルの『日本植物記』について」『植物と文化』第13号、1975年、2–13頁。

『訓蒙図彙』の研究は、辞書学、近世文学、書誌学など多様な視点から行われてきた<sup>4</sup>。また、『訓蒙図彙』に連なる書物 29 種を一括収録した『訓蒙図彙集成』(全 25 巻、大空社、1998-2002 年)も刊行されている。しかし、これらの「訓蒙図彙もの」を通史的に捉える研究、あるいは個別の事象、表象の伝播・展開について『訓蒙図彙』を踏まえた研究は未だ十分になされてはいない。

そこで、本論では『訓蒙図彙』の系譜とその展開を明らかにする序論として『訓蒙図彙』の成立から「訓蒙図彙もの」の派生までを述べ、「人物図」という切り口から近世中期の出版物における『訓蒙図彙』の位置を考えたい。

## 一 『訓蒙図彙』

本書は天文・地理・居所・人物・身体・衣服・宝貨・器用(1~4)・畜獸・禽鳥・龍魚・虫介・米穀・菜蔬・果蓏・樹竹・草花、の 17 部の分類で構成されている。見開き 1 丁ごとに四つの事物を配し、漢字・ひらがなで名称を記し、形状を図画で表している(図 1)。書型は大本で、十分に詳細まで描くことが可能な大きさである<sup>5</sup>。項目は 1484 個であるが、それぞれに俗称や異称も記載されているため、合計で 5 千語ほどが収録されている<sup>6</sup>。

楊斎がどのように編集を進めたのか。『訓蒙図彙』の冒頭に書かれた「凡例」からその編集方針を知ることが出来る。

凡此編は事物の名称、皆漢字を以て、之に題すと雖も、而も実は和名を以て主となす。

事物の名称については主に和名を用い、漢字で表記するという態度である。本書が児童の初学書を目指している以上、当然の方針といえる。また、「其和名も亦俗呼有る時は、即ち必ず之を採て鄙俚猥雑を避けず」との考えから、一つの事物に対して、正名、異名、俗称など複数の名前を記している。

また、図については下記のようにある。

諸品の形状並に茲邦の風俗土産に象る。凡て目撃する所の者は便筆して之を模す。或は画家の写する所に拠り、或は審に識者に問ひ、然して後工に命じて之を描成す。

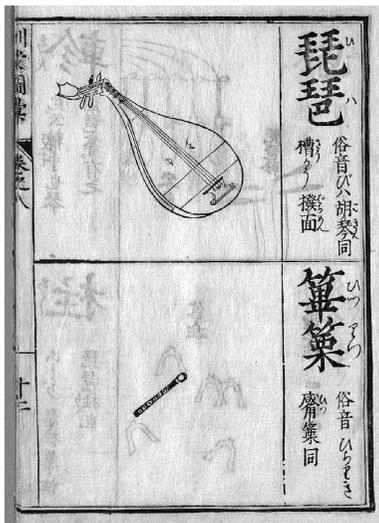


図 1 『訓蒙図彙』、国立国会図書館蔵

<sup>4</sup> 『訓蒙図彙』の内容、成立背景や諸本については、前掲注 2、杉本つとむ『訓蒙図彙』(早稲田大学出版部、1975 年)、勝又基「江戸の百科事典を読む」(『月刊しにか』11-3 号、2000 年、65-71 頁)、勝又基「解題」(『訓蒙図彙集成・別巻 江戸時代図説百科 訓蒙図彙の世界』大空社、2002 年、24-26、32-34、40-42 頁)などに詳しい。

<sup>5</sup> 例えば国立公文書館内閣文庫所蔵本は、縦 27.0×横 19.3cm である(前掲注 4 杉本つとむ、例言 vii 頁)。

<sup>6</sup> 前掲注 4 杉本つとむ、266 頁。

現物をもってその形状を確認することを基本とし、難しい場合は「識者」にたずねて正しい情報を得るようにしている。また、国内にないもの、有無が不明なものについては「異邦の風物を以て」補う、と明記している。

当然ながら、これらの作業には様々な参考文献が必要となる。凡例には引証書物として中国の書物では『三才図会』（万暦35年〔1607〕）、『農政全書』（崇禎12年〔1639〕）の他「諸家の本草の図説」を挙げ、国内の書物では源順『和名類聚抄』、林羅山『多識論』、『字鏡』、『壘囊抄』、『下学集』、『節用集』などの辞書類が挙げられている。

### （一）作者中村惕斎

本書の著者である中村惕斎（1629-1702）は、江戸時代前期に京都で活動した朱子学者である。寛永6年（1629）に京都の商家に生まれる。幼少より優れた学才をみせ、独学で朱子学を修め、同時代の伊藤仁斎（1627-1705）と並び称された。25歳で家業を継ぐも生来商売を好まず、30歳の時に学問に専心するため「断然トシテ俗交ヲ辞シ」た<sup>7</sup>。人柄は穩健、篤実と評されることが多く、喧騒を避けて京都中心部から僻地に居を移した。

惕斎の門人である増謙益夫が記録した『惕斎先生行状』などから惕斎の主な動向についてまとめると下記ようになる。

寛永6年（1629）	1歳	室町通街二条第一間生まれる
明暦元年（1655）	27歳	衣店街二条第一間西畔に転居
万治元年（1658）	30歳	長男清平誕生
寛文6年（1666）	38歳	『訓蒙図彙』叙
延宝6年（1677）	49歳	小川街二条第三間西畔に転居
貞享元年（1684）	56歳	伏見郷京町南八間へ転居
元禄11年（1698）	70歳	東九条宇賀辻村へ転居

傍線箇所をたどれば、惕斎が生まれてから56歳で伏見へ転居するまで、二条通を徐々に西へ居を移しながら暮らしていたことがわかる。東西の距離にして約350m、徒歩にすれば5分程度である。惕斎の生まれ育った二条界限は儒学者の町でもあった。松永尺五（1529-1657）が寛永5年（1628）に西洞院二条南に春秋館を建てて以降、儒学の私塾が次々と創設される<sup>8</sup>。二条堀川近辺は、山崎闇斎の講席が開かれたり、伊藤仁斎の古義堂が開設された場所でもある。周辺には本屋も多い。町には儒学を学ぶ場があり、そこに通う学者がいる。そのような環境で惕斎は儒学の学びを深めていった。

### （二）制作動機

書名に「訓蒙」とある通り、本書の目的は児童の啓蒙にある。その意図は惕斎自身が記した

<sup>7</sup> 増謙益夫『惕斎先生行状』（五弓雪窓編『関西大学東西学術研究所資料集刊十一 二 事実文編二』関西大学出版・広報部、1979年、213頁）。

<sup>8</sup> 衣笠安喜「元禄の文化第2節 学問と思想」（京都市編『新装版京都の歴史5 近世の展開』京都市史編さん所、1979年、419-442頁）。

「叙」を読んでも明確である<sup>9</sup>。

吾が家に児女有り。皆方に垂髻、内に姆の従ふべき無く、外に傳の就くべき無し。乃ち対照の制に倣ひて四言千字を連綴し、副ふるに国字を以てし、傍るに画象を以てして之を授く。

家内の児女には乳母も学問の師もない。そのため、自ら『四言』や『千字文』を連ねて国字を添え、そこに画図も付けたという。叙が記された寛文6年には惕斎の長男清平が9歳となっていた。惕斎には10歳年下の妻との間に二男・一女に加えて庶子があつた。長女の生まれが長男より先なのかは記録に残っていないが、『訓蒙図彙』成立当時に惕斎の家に幼童がいたことは確かである。自分の子どもの教育のため、様々な事物を図解した書物を作る。それが本書の制作動機であつた。

惕斎が著した子ども向けの啓蒙書は本書だけではない。娘のために女性向けの教訓書『比売鑑<sup>ひせがみ</sup>』も作っている。同書は、朱子の門人が編集した初学者用教科書である『小学』を基として、和漢の貞女を紹介しながら女性として身につけるべき礼儀作法や心得などを説いたものである。延宝元年(1673)に記された序文には「家なる女の童に『小学』教えんことをあらましけるに」漢文で記された書物しかなく、自ら仮名文字にして和漢の故事を編集した旨が述べられている。事物の名称・形状を学ぶことができる『訓蒙図彙』、礼儀や古今の故事来歴を知ることができる『比売鑑』と、惕斎は子どもの成長に合わせるように啓蒙書・教訓書を著しており、子どもに対する教育に重きを置いていたことがわかる。

しかし、惕斎が自ら書物を作る必要があつたほど、当時の子ども向け書物は充実していなかったのだろうか。確かに、儒学を学ぶ場合、用いるテキストは『大学』、『論語』などの経書であり、初学者向け、学問を大成した学者向けの区別はなく全て同じものである<sup>10</sup>。一方、読み書きを中心とした教育施設である手習所(寺子屋)ではどのような教材が用いられていたのだろうか。手習所(寺子屋)は室町末期より存在していたが、盛んになるのは近世期に入ってからである。何を学ばせていたのかは、地域や通う子どもの身分によっても異なるが、いずれにせよ読み書きが基本である。教材として用いられる往来物の内容は教訓、語彙、歴史、地理など多岐にわたる。石川謙は、慶長から万治(1596-1660)にかけて新たに作られた往来物として83点を挙げている<sup>11</sup>。最も多いものは教訓科の25点であり、語彙科は10点ほどである。語彙科の往来物は、単語短句などの練習を目的としたものであり、惕斎が求めた辞典・事典類とは異なるものであつた。

また、近世期に入り教育論も新たな展開をみせていた。その主導者は主に儒学者であつた。中江藤樹や山鹿素行などがその著作物のなかで、儒学思想に基づいた教訓や具体的方法などについて述べている<sup>12</sup>。家の存続のため、家主など一部の人間のみに向けた教育ではなく、社会全体に目を向けた教育論が展開するようになる。しかし、それらはいくまでも「大人」を対象とした書物のなかで語られたものである点に留意したい。

<sup>9</sup> 原文漢文。送り仮名は適宜補った。

<sup>10</sup> 辻本雅史『「学び」の復権——模倣と習熟』岩波書店、2012年、56-57頁。

<sup>11</sup> 石川謙『寺子屋』、至文堂、1966年、214頁。

<sup>12</sup> 山住正巳・中江和江編『子育ての書1』東洋文庫285、平凡社、1976年、18-22頁。

子どもへの教育環境や意識が徐々に整いつつあるなかで、しかし儒学思想に基づいた実用的な図解事典も女兒向けに編集された『小学』も存在しておらず、その点で惕斎の子ども向け書物は必要性和新奇性を備えたものであったといえる。

### (三) 『訓蒙図彙』の出版と読者

惕斎の著作は少なくないが、生前それらが刊行されることはほとんどなかった。例えば『比売鑑』も出版物として刊行されたのは惕斎の没後のことである。『比売鑑』は写本として成立したものであり、後年それを基に刊本が作られた<sup>13</sup>。成立当初は、家内の娘、あるいはその周辺の教育に用いられたのみであった。

しかし、例外的に『訓蒙図彙』は叙が記されてからすぐに出版されている。『訓蒙図彙』の諸本研究を行った小林祥次郎によれば、本書には書肆名のない版と巻末に「書肆 山形屋」と刻している版があり、印刷や装幀の状態から「初刷を美しく装幀して貴人に献上し」、次に市販するために書肆名を埋木したものが刷られた<sup>14</sup>。ただし、巻末の「山形屋」がいずれの山形屋を指すのかは特定できていない<sup>15</sup>。広範的な人的交流を好まなかった惕斎の性質を考えれば、江戸の版元は想定の外に置いた方がよいだろう。江戸初期に京都で営業をしていた「山形屋」は4軒あるが<sup>16</sup>、いずれも惕斎の居住地近辺であり、内3軒は二条通り沿いにある。衣棚二条の山形屋善兵衛、衣棚竹屋町の山形屋清兵衛は唐本屋であり、日頃から惕斎とやりとりがあったことも想定でき、二条界隈のネットワークから出版へと繋がっていったと考えられる。

では本書はどのように読まれていたのだろうか。惕斎は序文で、本書を自分の子どもに与えたところ、後日自ら物を見てその名前を呼び、その名前を聞いて物を指すことができるようになったと述べている。本書が教育用書物として優れていることについては、後年の学者、教育者も認めるところであり、例えば貝原益軒は『和俗童子訓』（宝永7年 [1710] 刊）の中で「世間通用の文字を知るべし。〔……〕近年印行せし訓蒙図彙、和爾雅、和字通例書などをえらび用ゆべし」と評している<sup>17</sup>。

このように子どもの教育用に用いられる一方で、多様な書物を典拠とし、異名・俗名を詳細に記録した本書の内容は、大人の知的好奇心をも十分に満たすものであった。故に貴人に献上される書物として板行されたのであろう。本書が二代尾張徳川光友（1625-1700）の蔵書に含まれているという一例をとっても、読者層の広さをうかがい知ることができる<sup>18</sup>。『訓蒙図彙』は、身分や年代を超えて広く読まれていた書物であった。

<sup>13</sup> 勝又基「『比売鑑』の写本と刊本」『近世文藝』第70号、1999年、1-10頁。

<sup>14</sup> 前掲注2、971-972頁。

<sup>15</sup> 杉本つとむは「山形屋市郎右衛門」とするが根拠は明示されていない（前掲注4杉本つとむ、例言、vii頁）。

<sup>16</sup> 井上隆明『日本書誌学大系 改訂増補 76 近世書林板元総覧』青裳堂書店、1998年、749-750頁。

<sup>17</sup> 貝原益軒『和俗童子訓』巻之四（静岡県立図書館蔵）。句読点、濁点などは適宜補った。この他の例として、倉島利仁は江村北海『授業編』（天明3年 [1783] 刊）や湯浅常山『文会雜記』（天明2年 [1782] 序）の評価を挙げている（解説『江戸時代図説百科 訓蒙図彙の世界』大空社、2002年、7頁）。

<sup>18</sup> 『瑞龍院様御隠居以後従表御取寄 御逝去後迎涼閣御文庫江入御書籍（寛保三年目録 巻四）一冊』名古屋市蓬左文庫蔵（『書誌書目シリーズ 49 尾張徳川家蔵書目録』第2巻、ゆまに書房、1999年、36頁）。

## 二 『訓蒙図彙』以降

### (一) 増補改訂版

『訓蒙図彙』の刊行後、元禄期と寛政期にそれぞれ増補改訂版が作られている（以降「寛文版」、「元禄版」、「寛政版」と記す）<sup>19</sup>。元禄版は、『頭書増補訓蒙図彙』という書名の通り、各図の上部に注釈が加えられ、項目も増補された（図2）。注釈文は漢字ひらがな交じりで記され、より平易な書物となっている。本書の編集に惕斎は関わっていないこともあってか、寛文版にあった学術性は薄れ「通俗化」された事典となった。寛文版から約30年経っており、時代や読者に応じた改変といえるだろう。

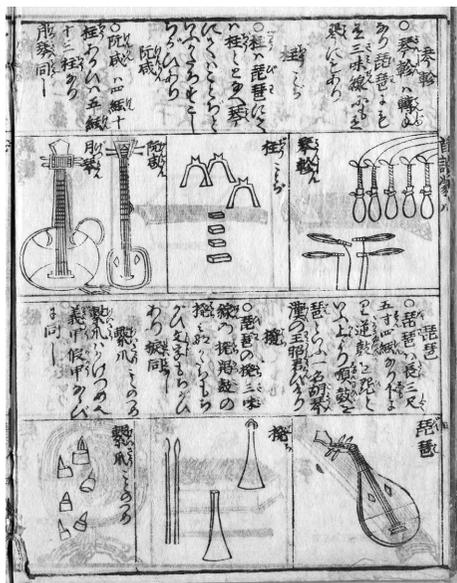


図2 『頭書増補訓蒙図彙』、国立国会図書館蔵



図3 『頭書増補訓蒙図彙大成』、早稲田大学図書館蔵

寛政版はその元禄版を基にしている。初めて絵師の名前が明記された本書は、図を大きく配置する構成に変え、個別に書かれていた事物の図を一図の中に組み合わせるなど視覚的な面を強調したものとなっている（図3）。本書は元禄版から約100年後の刊行であるが、その間に発展した博物学・本草学・医学などの影響を踏まえ、情報が更新されている項目もある<sup>20</sup>。1666年に成立した百科事典が、様々な版元、作者、絵師による改変を加えられながら120年以上も命脈を保ち、それぞれの時代に読者を開拓していった。

### (二) 様々な「訓蒙図彙もの」

『訓蒙図彙』自体の増補・改訂版に加え、事物を絵と言葉で列記するという趣向の書物が次々

<sup>19</sup> これ以外に寛文8年（1668）に図を縮小した縮刷廉価版、享保17年（1732）に図を縮小し、配列を若干変えた版がある。

<sup>20</sup> 前掲注4勝又基、70頁。

を刊行された<sup>21</sup>。多くは書名に「訓蒙図彙」という語を含み、惕斎の書物に連なる企画であることを表明している。

最初の「訓蒙図彙もの」は貞享元年（1684）の『武具訓蒙図彙』である。甲、具足など、武具ごとに分類し、多様な種類を個別に解説している。作者は京都に住む和算学者の湯浅得之で、京都と大坂の版元から刊行された。

これ以降の「訓蒙図彙もの」は、性道具や階級毎の性風俗を分類した『好色訓蒙図彙』（貞享3年〔1686〕刊、京都）、着物や髪型、道具類など女にまつわる風俗をとりあげた『女用訓蒙図彙』（貞享4年〔1687〕刊、江戸）、故事や世話字などを扱った『難字訓蒙図彙』（貞享2年〔1685〕刊、江戸／同4年刊、大坂）、舞台や面、衣装、小道具の他、役者なども記載した『能之訓蒙図彙』（同年刊、京都）、階級や職業で分類した『人倫訓蒙図彙』（元禄3年〔1690〕刊、京都・大坂・江戸）、仏像や仏具などを詳細に分類した『仏像図彙』（同年刊、大坂・江戸・京都）、抛入花や調度品を扱った『立花訓蒙図彙』（元禄9年〔1696〕刊、大坂）、中国の事物にのみ特化した『唐土訓蒙図彙』（享保4年〔1719〕刊、大坂・江戸）などが続いていく。

事物を属性ごとに分類し、その形態・容姿を図解して名称を付すという『訓蒙図彙』のスタイルは、子どもに限らず初学者にとって便利な書物であった。そのため、『武具訓蒙図彙』以降は、『難字訓蒙図彙』をのぞけば各分野に関心のある大人の初学者を読者として想定している。森羅万象を扱った『訓蒙図彙』から、細分化された「訓蒙図彙」が派生していき、それに合わせて読者層も広がっていったといえる。

また、正徳から享保の間（1711～1736）には『三才図会』を基にした『和漢三才図会』が刊行される。105巻81冊にわたる大部であり、絵入百科事典はいよいよ充実した局面を迎える。

そのような盛行に応じるように、吉原に関する事物を分類した見立絵本『新造図彙』（山東京伝、天明9年〔1789〕）といった『訓蒙図彙』、『三才図会』を模した書物も登場する。

子どもへの啓蒙書として成立した『訓蒙図彙』の流れは、江戸中期以降読者層を広げながら様々な分野の図解百科事典と展開していき、初学者向けの外国語教科書として翻訳・編集された明治4年（1871）の『泰西訓蒙図解』にまでつながっていく。

### 三 『訓蒙図彙』の前後——人物図

これまでみてきたように、『訓蒙図彙』は多様な書物を渉猟して一書を成し、その後時代を超えて広範囲に様々な書物を生み出した。その流れを微視的に捉えようとしたとき、どのような様相が浮かび上がるのだろうか。ここでは「人物図」に限って『訓蒙図彙』の前後について考えてみたい。

<sup>21</sup> 『訓蒙図彙集成』（大空社、1998–2002年）では、訓蒙図彙ものとして下記30点の書物を収録している。立花訓蒙図彙、謡曲画誌、歳旦訓蒙図彙、暗夜訓蒙図彙、外科訓蒙図彙、陰兼陽珍紋図彙、増訓画引和玉図彙、新造図彙、奇妙図彙、戯場楽屋図会、楽屋図会拾遺、戯場訓蒙図彙、花鳥写真図彙、璣訓蒙鏡草、機巧図彙、泰西訓蒙図解、能之訓蒙図彙、改正能訓蒙図彙、好色訓蒙図彙、武具訓蒙図彙、頭書増補訓蒙図彙、女用訓蒙図彙、人倫訓蒙図彙、難字訓蒙図彙、立花訓蒙図彙、仏像図彙、増補仏像図彙、唐土訓蒙図彙、訓蒙図彙、訓蒙図彙大成。

(一) 世界図、万国人物図、三才図会

『訓蒙図彙』の「人物」部門には80種の人物図が掲載されている。そのうち、異国、あるいは異界の人物については18種が立項されている。惕斎は、国内でないもの、その存在の有無が不明なものについては「異邦の風物」で情報を補った。異界の人物図について、その多くは『三才図会』に典拠を求めることができるが、なかには凡例で触れていない書物に拠っている図もある。海野一隆は18種の内「南蛮」「呂宋」「暹羅」「東番」「小人」は正保2年(1645)刊『万国総図・万国人物図』と共通する絵柄だと指摘する<sup>22</sup>。『万国総図・万国人物図』は世界図と世界人物図を対にして制作されたもので、世界図はイエズス会宣教師マテオ・リッチ(利瑪竇)が中国(明)で1602年に刊行した『坤輿万国全図』をもとにしている。つまり、惕斎の人物図には中国を源流とするものと、中国を経由して西洋からもたらされた情報をもとにしたものの2種類が混在しているのである。

ただし、典拠となった図をそのまま写している図もあれば、一部を改変している図もみられる。例えば「呂宋」の場合、『万国総図・万国人物図』では男女二人を一組で描いているのに対し、『訓蒙図彙』は男のみを描き出している。



図4 『頭書増補訓蒙図彙大成』、早稲田大学図書館蔵

また、手長の「長臂」は『三才図会』では長い腕を天に伸ばしているが、『訓蒙図彙』では片腕をもう一方の腕に添えている。おそらく画面の構成などに併せてこのような改変が行われたのだろう<sup>23</sup>。

これらの人物図、あるいは「編集」は元禄版にそのまま引き継がれていくが、寛政版で変更される。特に「長臂」や「占城」「長人」など異界の人物の描かれ方は、それぞれの特徴がわかりやすく図示されたものとなる(図4)。一方、「中国」「琉球」「朝鮮」などの実在する異国人は装束の描かれ方がより詳細にはなっているものの、基本的な情報は寛文版から大きく変わっていない。前述したように、寛政版では本草学や医学などの情報が最新のものを踏まえていたことと対照的といえる。

享保5年(1720)には洋書の輸入制限が緩和されているが、異国人物図についてはその影響を受けていない。全ての項目において等しく情報の更新が行われているのではなく、その差異を考察することで寛政版の編集方針、あるいは編纂者の性質を明らかにすることが可能といえる。

<sup>22</sup> 海野一隆「江戸時代刊行の東洋系民族図譜の嚆矢」『日本古書通信』第896号、2004年、6頁。

<sup>23</sup> 勝又基「絵入り百科事典の工夫——『訓蒙図彙』と『和漢三才図会』」(鈴木健一編『浸透する教養』勉誠出版、2013年、133頁)。

## (二) 人物を分類するということ——西川祐信の雛形本まで

一方、異国人以外の図は「職業人物図」の性質を有している。「公家」「卿」から始まり、医者や巫女、遊女、職人などが52種立項されている。人物を職業や身分など属性ごとに分類するというこの方法は、その後『人倫訓蒙図彙』に引き継がれる。同書の多様な人物の所作や来由を人に尋ね、あるいは和漢の書に求めるという姿勢は、『訓蒙図彙』の方針と重なるものであり、そのように情報収集された約500種の職業が収録されている。

同書以降、特に女性の職業に特化したものとして享保元年(1716)『女大学宝箱』がある。女性向け教訓書の本文上部3分の1に差し込まれた挿絵には糸引屋や扇屋、汐汲みなど43種の職業が描かれている。

西川祐信(1671-1750)は、女性の職業をさらに拡充し、享保8年(1723)『百人女郎品定』(京都・八文字屋版)で100種を挙げた。横山冬彦は、同書が『人倫訓蒙図彙』の女性職種と分類を継承しているとした上で『人倫訓蒙図彙』で入り交じっていた売色類の再整理を行い、さらにその職業を増補したと指摘する<sup>24</sup>。

ただし、祐信が八文字屋と組んで人物を分類し、網羅的に描いた書物は『百人女郎品定』だけではない<sup>25</sup>。同書に先行して多様な人物を描き分けた艶本を手がけている。その最も早いものが宝永8年(1711)の『色ひいな形』で、人物を公家、武家、農民、町人、商人の五つに分けてそれぞれの性生活を描いた。さらに売色風俗を細目化して、描写した『情ひいな形』(正徳2年[1712]刊)、『妻愛色双六』(享保4年[1719]刊)があり、微に入り細にわたって職業を描



図5 『正徳ひいな形』、東京藝術大学附属図書館蔵

<sup>24</sup> 横田冬彦『「女大学」再考——日本近世における女性労働』(『ジェンダーの日本史』下巻、東京大学出版会、1995年、372-373頁)。

<sup>25</sup> 拙稿「訓蒙図彙と祐信春本・絵本——『色ひいな形』から『百人女郎品定』まで」(石上阿希編『祐信を読む』立命館大学アート・リサーチセンター、2013年、71-85頁)。

き分けた絵師といえるだろう。これらの艶本はいずれも八文字屋から刊行されたものである。

祐信と八文字屋は身分ごとに人物を分類するという編集方法をさらに雛形本へと展開していく。正徳3年(1713)に刊行された『正徳ひな形』は、公家、武家、町人、傾城、若衆、野郎の別に、「着物」を分類した。従来の雛形本は、背面小袖図に模様や色を指示する実用的な書物であったが、そこに身分・職業という配列の方針を加えて編集したのである(図5)。

『訓蒙図彙』の追随作は特に京都・大坂で発展をみせたが、多様に派生していく流れの末尾の一つには、「訓蒙図彙」を冠しないこのような書物があった。

## おわりに

はじめにで述べたように、本論は『訓蒙図彙』の系譜やその展開を考察するための序論であり、最後に今後の研究課題を挙げてまとめとしたい。

はじめにで述べたように、これまで「訓蒙図彙もの」を通史的に捉えた研究はなされていない。江戸初期から明治初期まで、あるいは訓蒙図彙以前も含めてこれらの書物をながめることで、古今東西の知識・情報が書物という経路によってどのように浸透していったのかを考察することができるだろう。

また、特定のテーマで「訓蒙図彙」を追いかけたときに何が見えてくるのかという問題もある。今回は「人物図」と江戸中期の上方における出版について論じたが、様々な切り口から「訓蒙図彙もの」を辿っていけば、さらに豊かな展開図がみえてくるのではないだろうか。

これらの研究と平行して、「近世絵入百科事典データベース」の拡充を進める。例えば、データベースを用いることで、異なる三版の『訓蒙図彙』の画像と翻刻を項目毎に見比べることが容易になれば、情報更新の傾向や編纂者の編集方針をつかむ手立てとなるだろう。あるいは、各画像に対するタグ付けを充実させることで、おもわぬ情報の連鎖や共通点がみえてくるかもしれない。

また、このデータベースを『訓蒙図彙』に連なる展開の一つとして考えるならば、「訓蒙図彙もの」がもたらす現在進行形の文化的展開をおうことも可能となる。それらの事象が顕在化するまでには時間が必要となるが、そのような可能性を含めてこれらの問題について考えていきたい。